

表現を含む）の言葉が見られる。これとは別に「菩提」・「念仏供養」・「逆修」といった言葉も見られる。これ以外のものは、おおよそ銘文が無い、もしくは銘文から造立目的が読み取れないものである。とすると、当該地域の、路傍の地蔵の多くは、「二世安楽」もしくは「後生善処」を願って造立されたものと考えられる。ここで早くも道祖神との習合説が否定される。道祖神の職能をまとめるのは困難だが、少なくとも、道祖神に後生善処を願うことは稀であろう。

では地蔵の設置場所はどうだろうか？ 当該地域の「路傍の地蔵」八十四体のうち、村境に祀られたのと考えられるのは五カ所に過ぎない。年代の早いものとしては、杉並区和田一ノ五八・十貫坂の地蔵（一七二七年造立）がある。杉並区井草一ノ三・井草観音堂の地蔵（一六六七年造立）・杉並区高円寺南五ノ三二の地蔵（一六七六年造立）・板橋区大谷口二ノ十三の地蔵（一六七七年造立）に比べると、十貫坂の地蔵は年代的に遅い。但し、十貫坂の地蔵は、悪病退散の職能が期待されて造立されたという伝承を持つ。しかし、この職能は中世地蔵信仰からの継承と見なすこともできる。

道しるべの職能はどうだろうか？ 地蔵の道しるべの職能もまた道祖神との習合とする説がある。当該地域に於いて道しるべの銘文を持つ地蔵は、一七三〇年以降一般的になる。まず「二世安楽」を願って路傍に地蔵像が造立されるようになり、近郊の農民が江戸へ野菜等を売りに出かける便宜を図るため、一七三〇年代になって、道しるべの職能が付加されたと考えられる。「農民」と判断したのは、道しるべの銘文が「是より□

道」・「多ど屋」等平仮名と漢字とが混交しているからである。当該地域に関する限り、路傍に地蔵が造立されたのは、もともと「二世安楽」を願ってであり、また、道祖神と共通する職能を有するのは一部の地蔵に限られる。路傍に地蔵が祀られるようになったのは、道祖神との習合からではない。路傍の地蔵と道祖神との習合は後に生じた現象なのである。

神概念をめぐる言説空間

——現代日本の場合——

近 藤 光 博

本研究では、現代日本語における「神」という語の使用例を二百余り収集し、その意味内容を分析するとともに、この語にまつわる言説空間をコミュニケーションの成立の在り方という観点から検討した。

《現代日本語の言説空間》において「神」という語は、あまりに自由闊達、ほとんど無原則なかたちで使用され通交している。これは事実上、日本語話者にとって「神」という語がほとんど無内容に等しいということを意味する。教科書記述等から判断する限り、こうした状況に対し、国家権力も規制を設けず、むしろこれを追認しているとみなしうる。

現代日本語の「神」という語は「西洋的」な性格をつよく帯びるようになっていく（その実態は、キリスト教とギリシア神話の無自覚な混合）。その一方、日本列島古来の神道系／民俗系の「神」「神々」の観念も、必ずしも「神」という呼び名／

範疇に引き付けられてはいないものの、依然つよく息づいている。

子ども向けのメディア／コンテンツには、優しく恵みをもたらす「神様」がしばしば登場する。大人もまた、同様の「神」について語るが、必ずしも「神」を善なる存在、優しい存在としてばかりはみなさない。ここには、日常生活の善悪の不条理と、幼少期以来、無自覚なままに植え付けられてきた右記「神」観念との齟齬・葛藤の様がみてとれる。

このように現代日本語者が、かなり豊かな「神」についての語りをもつ一方、彼ら／彼女らは、まさにその「神」の実在についてはひどくあいまいなままにすませる傾向がつよい。かなり明確に「神」の人間主義的還元を主張する言説が力を有している一方、それが無神論として確立しているとはではない。い。「神」の実在性はあいまいなままにされているか、もしくは端的に不問に付されているというのが実情である。

最後に、本研究が明らかにした重要な点として、四〇代～五〇代の男女の日本語話者のなかには、おそらくは一般に想定される以上に豊かな神理解／神論が見いだされることをあげるることができる。二〇歳前後の若者にはそうした理解が未発達なことから、二〇代から三〇代の期間を通じて、現代日本語話者は日本社会のなかで、多様なソースに頼りつつ、何らかの神理解／神論を広く形成していく、そのような可能性のあることが知られる。

本研究が明らかにしたこれらの点は、ポスト宗教概念批判の宗教学が取り組むべき、一般的な宗教理論の刷新にとって、一

定の方向性を示すことができる。なぜなら、《神概念にまつわる現代日本の言説空間》の解析は、神概念が西欧キリスト教世界由来であり、日本の歴史情況にそぐわないことを指摘するにとどまらず、それ自体の世界観／価値観、およびそれに対応する個人的・集合的な諸実践を理論的に提示することができるからだ。

具体的には、現代日本語の「神」が実在論から自由である点を再評価することが有効だろう。それは、ある柔軟で融通無碍な想像力の、弱く柔らかな通交と、それに伴う「共同性」の所在を指示しているように思われる。

比較宗教論／宗教現象学が近代プロテスタント神学を祖形にすることで確立し、近代日本が翻訳・翻案し定着させるにまでこぎつけた、一般的な抽象名詞である「神」。この語をあらためて歴史化することは、（宗教概念の積極的解体をまで視野におさめた）宗教理論の刷新をまで視野におさめるはずだ。